靴箱の教育学

担任時代に続けていたことの一つに下駄箱の観察があります。

朝の打ち合わせ後、児童下校後に下駄箱を観て、乱れている靴を直す。

これだけのことを、２００日続けるのです。（出張でいないときも、帰ってきてから必ず下駄箱を観ます）

乱れている靴は、余裕があるときは全校分直します。

その上で、朝、靴が乱れていた子どもには必ず声をかけていました。

もちろん、雨・雪の日には、「足が冷たくないかい？」と子どもに声をかけます。

朝の会の時には、きちんと靴が揃っていた子どもには称賛の言葉を。

また、児童下校後にも靴を観て、子どもたちの顔を思い浮かべ、今日の仕事を反省します。

行事などで、あわただしく、厳しく子どもたちに指導した際には、必ず靴が乱れていたものです。

ですから、次の日にはできるだけ、子どもたちをほめてあげるようにしたものです。

また、全校分靴をそろえていましたので、１ヶ月くらいで全校の靴の入れ方が良くなりました。

子どもたちが、気づいてくれたのかもしれませんし、私の様子を見て、ほかの先生方が指導してくださったのかもしれません。

その辺はわからないのですが、とにかく下駄箱の靴はとてもきれいに揃うようになりました。

大教育者森信三の言葉を引きます。

心を正そうとしたら、先ず躰を正し、ものを整えることから始めねばならぬ。靴をそろえることの一つが、いかに重大な意味を持つか分からぬような人間は、論ずるに足りない。

森信三『一語千鈞』（致知出版）

山田の鞄に常に入っている本です。

人生と教育を重ねる。

５／４の研修会で、私は足の不自由な人が参加されていることに気がつきました。

華美ではない品のよい赤いスカーフをされていたのですぐに目にとまりました。

気が弱いので、すぐに声をかけることができなかったのですが、終了後タクシーに乗るところまでは、声をかけ、介助して差し上げました。

すると、その女性は、「退職教員」であること「大阪からきたこと」を私に告げました。

これまでも、現職の教員が遠くから（一番遠くは長崎県の壱岐から）参加された方がいました。

しかし、その方は「退職教員」です。

しかも、足が不自由なのにもかかわらず、たった一人で大阪から来られたというのです。

また、こうも言われました。

「足の状態が少し良くなったので、何とかこられました」

つまり、ついこの間までは歩くことさえ困難だったということでしょう。

その言葉を聞いて、私は心の中で手を合わせました。

私も、いくつになっても、それほどの情熱を教育にもてるのでしょうか。

私も、あの方のように人生と教育を重ねた生き方ができるのでしょうか。

人に嫌われる方法

Ｄ・カーネギーの『人を動かす』（創元社）（アメリカで４００万部以上売れ、日本でもおそらく２００刷近いだろう）という普及の名作があります。この本は、教師なら一度は目を通すべき本といえるでしょう。

最近、もう一度読み返してみると、非常に胸が痛みました。例えば……。

人に嫌われるために守るべき条項というのがあります。

一、相手の話を、決して長くはきかないこと。

一、終始自分のことだけを話すこと。

一、相手が話している間に、何か意見があれば、すぐに相手の話をさえぎること。

一、相手はこちらよりも頭の回転がにぶい。そんな人間のくだらん話をいつまでも聞く必要はない。話の途中で遠慮なく口を挟むこと。

ああ、反省、猛省。